**寄　稿**

**CELTIC ART**

**河野　田美子**

　雨上がり、クローバーがぐんとのびる。“シャムロック”、アイリッシュクローバーの名前。喜びが私をつかんだ。夏がくる。２年前、アイルランドにいた。｢ケルト文化を訪ねる旅｣をして。

　私達のバスはボイン渓流のほとり、｢ニューグレンジ｣に到着。ピラミッドより古い遺跡にびっくり仰天したのは、大小の石の組合せだけで何千年も何万トンの重さに耐えていること。青空と果てしなく広がる緑の丘にひっそりと息づく美しい世界遺産。２０分のトイレ休憩。おみやげを買いたい。綿密な旅行プログラムに<みやげ用時間割>はナシ。卒論｢Iris Murdoch論｣から22年、生前来日の折、お会いできた忘れられない思い出もあり、アイルランドへ行くことは、そののち天からふってきた勤め乍ら母を看る９年の生活のうち、忘れ去った夢だった。｢日本アイリス・マードック学会｣が出来、入れて頂いた。全員におみやげを買いたかった。旅の感謝をこめて。出発前、名簿を念入りに数えた。４２名、四十七士に５名不足。と覚えた。４２人だから軽くて小さい物。学会だから本に関わる物。しおり！、と閃いた。｢神様、夢のように幸せな旅に感謝いたします。おみやげに今、栞を思いつきました。私達全員にどうぞあなたのご祝福を下さい｣とお祈りした。

　時計の針を睨み、トイレの列を並び終えると、みやげ物コーナーだ。あらっ！栞？正面の豊かな彩りが目にとび込んだ。“一番美しい”のを手にとった。プラスチックのようで、厚みと幅のある２０㎝程の素敵な物。聖書写本『ケルズの書』からとった美しいケルトの文様だ。金網に掛けられたフックに、模様別の大束がズラリと下がっている。一番美しい束から42人分、一枚ずつはずしていった。金網のフックは不安定で、真新しく滑りが悪かった。栞の穴の方が小さいと思う位固くはめ込んであり、ギッシリとして両手を使ってもとれなくなった。手に入るだけ、と心に決めた。少し離れた所に店員が客の応対をして呼べば来てくれる。が、事態は一秒を争った。周りの人影がす―っと引いて旅行者がいない。集合地は遠く、一人で辿り着けない。最後の人を追いかけよう。頭は白く、手は一枚でも多くメチャクチャムシリとった。格闘しつつ売ル気ハアルノカ！と心で叫んで。分捕った束を両手に跳んでレジに渡す。｢これはアイ I です、いいですか？｣｢イエス｣。　いつもの後姿に追いつく。口元にほっと笑いがこみ上げた。

　黄葉の始まった薄緑の木々の間に花盛りの真紅のフューシャ(ホクシャ)が風に揺れて、｢きれいですね｣と互いに言い合った。明るい午後の日差しのもと、足りない分、亦何処かで見つけよう。おんなじ物はムリかも。と自分に言いきかせた。びっしり一日のスケジュールを終って次のホテルに到着。みんなで楽しい、遅めの夕食をとり、自室に入った。雑用、入浴、洗濯、下手な荷物整理。やっとティ―タイム。熱いティ―を入れて椅子にかけた。ああシオリ。数を手帳に書いて今日の分きちんとスーツケースにしまおう。頭に浮かんでバッグから取り出した。重い眼にもずっしりと存在感のある栞は美しかった。淡いグリーン地に周囲は白。青、オレンジ、黄色で中身に文様入りの華麗な“I”という一文字が描かれ、黒でCELTIC ART　と上部に記されていた。溢れる色柄の中で一番いいと思ったけど、あれは全部、ケルト文化固有のデザインで描かれたアルファベット２６文字だったことに気づいた。｢神様、こんな美しい栞をありがとうございます｣とつぶやいた。とっても嬉しかった。一枚一枚数えた。再度、数えた。42枚。赤穂浪士に５枚足りない数。深夜、目を閉じてじっと茶色の薄紙の袋を握っていた。

　朝、走るバスの中からピンクのヒ―ス、黄色のラグワートの咲きこぼれる草原をみつめながら、私は何もわからないで I を買ったけど、アイリス・マードックの、アイルランドの頭文字なのだと思った。